作家ヤスミナ・ハドラ Yasmina Khadra との対話

2010 年３月 10 日　パリ、アルジェリア文化センター
訪問者：筑波大学北アフリカ研究センター関連教員：
安部征雄、森尾貴広、岩崎真紀、谷川多佳子、青柳悦子

作家ヤスミナ・ハドラ（本名：モハメッド・モウレッスフール Mohammed Moulessehoul）は現在、パリのアルジェリア文化センターの所長を務めている。会談はセンター長室で午前 10 時から２時間にわたって、文学研究を専門とする青柳とのやりとりを中心に、なごやかにおこなわれた。この会談は、ケトランジ在日アルジェリア大使のご厚意による仲介を経て実現したものであり、大使にはここに改めて感謝の意を表したい。

対話の録音はおこなわなかったため、以下は正確な記録ではなく、青柳の記憶をもとに大まかな内容を再構成したものである。おもに文学関連の話題に絞って再現したことを断わっておく。

なお■はヤスミナ・ハドラの発言を、□（および□□）は訪問者側の発言を標す。

□わざわざ廊下までお迎えに来ていただいてありがとうございます。お会いできて光栄です。

■ようこそいらっしゃいました。

□ご多忙のところ、お時間をとっていただいて恐縮です。

〈アルジェリア文化センターと昨年の来日について〉

■実際、毎日、センター長としてほんとうにとても忙しい日々を送っているのですよ（笑）。

□文化センターではどんなお仕事をなさっているのですか。

■ここでは、講演会、音楽コンサート、美術展、展覧会、映画の上映、演劇の上演、アラビア語授業、各種セミナーなどを頻繁に開催しています。１階にはコーヒーラウンジもあります。ヨーロッパ各国、アメリカのマイアミやロスアンジェルスなどの各都市など、世界との交流もひっきりなしにあって、多忙をきわめています。なにしろ、アルジェリアには才能のある文化人、芸術家がたくさんいますから。

□アルジェリア文化センターは、世界の他の都市にもあるのでしょうか？

■いいえ、ここが唯一です。ですから、世界中からのさまざまな要望に応えなくてはなりませんし、世界各国との連絡だけでもほんとうに大変です。近年、アルジェリアへの関心は高まっていますからね。毎日 7 時、8 時までここで仕事にかかりきりです。おかげで、着任してからのこの２年半、執筆の時間はほとんどありません。

□でも、今年、新しい小説（*L'Olympe des Infortunes* ）を発表なさいましたね。

■あれは、センター長に就任する前に書いてあったものです。編集者とのやりとりの時間さえほとんど持つことができずに、刊行が遅れてしまったのですよ。
□パリでの生活はあなたにとってどんな意味がありますか。
■アルジェリアの軍隊を引退して、エクス・アン・プロヴァンスで落ち着いた日々を楽しんでいました。執筆を中心にして。エクスに家もあります。しかし、ここのセンター長を引き受けることになったため、パリに住んでいるわけです。それだけで、ほかの理由はありません。朝から晩まで、センター長の仕事に追われて、ここがパリであるかどうかもわからないぐらいです。
□なぜセンター長をお引き受けになったのですか？
■とても強く懇請されて、断ることができなかったのです。なにしろ大統領みずからが、直接、私に依頼してきたのですから。それに私は、生来アクティブな人間ですからね。エクスの静かな日々はもちろんすばらしいものでしたが、毎日毎日静かな、何もない生活を送るのは、だんだん物足りない感じになってきていました。35 年間軍隊に居て、私は常に活動的な人生を送ってきた人間ですから。
　ところで、あなたにはお会いしたことがありますね？　去年、日本で。
□いいえ、残念ながら、あなたが日本にいらしたときには、私はちょうどマグレブに、チュニジアにいたので。ですから今日、初めてお会いできて、とてもうれしく思っています。日本はいかがでした？
■とてもすばらしい国ですね。福岡、大阪、京都にも行きましたが、滞在は１週間だったので、あまりにも短く、残念でした。東京の街並みすら、ろくに見ていないのです。
□また、ゆっくりいらしてください。今度は一か月ぐらい必要ですね。
■まったく。日本の良いところは、伝統と現代の両面が存在していることです。もしかしたらあなたたちは気づいていないかもしれないけれど、日本人はきわめて独自な伝統を今なお息づかせている。それが高層ビル群や近代的なテクノロジーにあふれた生活と共存しているのは、実にすばらしい。
□でも、少し、あわただしすぎる印象ではなかったでしょうか？
■たしかに。だがそれは、アジア地域に共通のリズムなのではないでしょうか。
□私は逆に、昨年秋に、初めてアルジェリアを訪問しました。アルジェ、ビスクラ、コンスタンチーヌを訪ねました。アルジェリアは商業資本主義の狂奔からまぬがれているところが魅力的でした。そしてアルジェリアの人々は、内面生活を大事にしているように思いました。
■アルジェリア人は、みな自分の心配事で頭がいっぱいで、内向きになっているのかもしれませんよ（笑）。

〈アルジェリアと文学について〉

□アルジェリアの人は文学的素質に恵まれているように感じました。ところで、アルジェリアには十分な読者層があるのでしょうか？
■おっしゃる通り、アルジェリアの人々は昔から文学好きでした。独立直後でもたくさ

んの出版社があり、みなが多くの読書習慣をもっていたのです。文学も盛んでした。ところが 80 年代から出版社が衰退していきます。社会が宗教しか重んじないようになり、日常の生活を描いたり、人々に自らものを考える機会を与えたり、世俗の生活を生き生きと描写する文学やその他の書物が、抑圧されるようになっていったのです。そして、ほとんどの人が書物を読む習慣を失い、書店は街から消えてしまいました。

□今はいかがでしょう。

■状況はずいぶんよくなってきました。

□でも庶民には本は高価でしょうね。

■たしかに。アルジェリア人にとって本はあまりにも高すぎます。本 1 冊がふつうの人の月給の 3 分の 1 もしてしまうことがあるのです。それではとても買えません。輸入書に大きな関税がかけられているからなのです。

□むしろ、出版物への援助がほしいところですが。国内の出版社はどうですか？

■かなり活発になってきましたよ。さきほど輸入書籍が高いと言いましたが、そのため、アルジェリア国内で並行的に印刷出版する、という方法で、より安価な書籍が多く売られています。

□人々が容易に買えないとなると、出版点数も、出版部数も当然小さくなるでしょうし、そうするとますます出版界が貧弱になってしまう恐れがありますね。読者層も貧弱なままということになってしまいそうです。それに現代はヴィジュアルなものに傾きがちですし。

■出版部数が読者数を反映しているかどうかについては、注意しなくてはなりません。アルジェリアでは、読書をめぐる習慣が違うのですから。あなた方は、本は個人で所有し、所蔵するものだと思っていませんか？　アルジェリアでは、本は人のあいだをめぐるものなのです。父親が買ったら家族や親戚が次々に回して読む、などという具合です。本は、親しい人間どうしのあいだをつないで、動いて回るのです。

□みんなで 1 冊でよいとなると、本があんまり売れず、出版社や書店の経営は難しいでしょうね。

■そういう問題はあります。でも幸いアルジェリアは、それほど経済発展していませんから、子供がデジタルゲームで一日中遊ぶとか、家に何台もテレビがあるなどということは、まずありません。やはり本は大事な余暇のパートナーです。つらいことも多いですからね。本のなかに浸っている時間は至福の時間ですよ。好きな人には。
□それでは、ともかく、アルジェリア国内での出版活動はそれなりに盛んであり、信頼できる出版社もいくつもあるという状況でしょうか？
■本当のところを言うと、今、信頼できる出版社、編集者は、アルジェリアにはせいぜい、１，２というところです。
□なかなか難しいですね。そして新しい世代の読者を育てなくてはなりませんね。
■今では、一般読者の興味を引きつけるだけの魅力のある作品が国内でも見受けられるようになってきました。90 年代後半ぐらいからです。自慢をするわけではありませんが、私の作品がその現象を生み出したのです。私の『モリチュリ *Morituri*』（1997 年）から読者層が復活し、同時に若い読者が誕生し始めたのです。しかし、現在の若者の多くが、教育の混乱のせいで、読書を楽しむだけの言語能力を身につけていません。アラビア語にしろ、フランス語にしろ、です。これは大問題です。

〈言語・教育・出版をめぐる諸制度〉

□アルジェリアの教育制度はいかがでしょう。
■正直に言って、アルジェリアには、「制度」と呼べるような教育の一貫したシステムは存在しません。現状は、植民地時代の影響を含むフランスの制度、アラブ世界の教育法、現代のいろいろな欧米のシステム、もろもろの改編案など、さまざまな教育の体制をきれぎれに寄せ集めたにすぎない状況です。教育の全システムに一貫性を持たせることが何より重要です。日本はそれができています。アルジェリアの課題はそこにあります。言語の一貫性も重要です。
□あなたはフランス語で書く作家として活躍されています。どうしてフランス語で書くことを選ばれたのですか？
■アラビア語を拒否してフランス語を選んだわけではありません。実は高校生のころ、私はアラビア語で詩を書いていたのです。しかしアラビア語の教師たちのなかには、誰も私を教え導いてくれる人がいませんでした。反対に、フランス語の方面では、読書についても文学についても、私を指導してくれる先生がいたのです。創作についても励ましを受けました。そうした先生のおかげで、私はフランス語での執筆へと導かれました。今では私の作品はアラビア語にも訳されています。ほかの人の手によって、アラビア語のテクストになっていることに、私は実はジェラシーを感じているんですよ。
□アルジェリアでは、アラビア語で書く作家やそれを読む読者と、フランス語を用いる作家とその読者とが分かれて、文学界・読書界が二分されているということはありますか？　それとも相互に密接な交流があるのでしょうか？　読者のなかにはアラビア語とフランス語の両方で読むという人もいると思うのですが、そのあたりはいかがでしょう。
■私も含め、両方の言語で読む読者は結構多いですよ。ただし、フランス語の側にね。

つまりアラビア語で読む人の場合はもっぱらアラビア語、となりがちなのに対して、フランス語で読む人の場合は、基本的に、両方の言語で読む習慣があると思います。
□アルジェリアでは、フランス語の文学とアラビア語の文学と、どちらが盛んだといえますか？
■フランス語の文学です。アラビア語は何より宗教のための言語ですから。
□たとえば、チュニジアと比べた場合、どうでしょうか？
■チュニジアのことは私にはまったくわかりません。でも、おそらく、チュニジアと比べれば、アラビア語の文学も、フランス語の文学も、どちらもアルジェリアの方が活発だと思います。
□人口は別にしてその理由ですが、チュニジアはむしろ商業など実践的な活動的に向いていて、アルジェリアの方が文学を重んじる傾向があるのではないでしょうか。
■それよりも、アルジェリアでずっと前から文学が盛んである理由は、アルジェリア人たちがほかの国よりも多くの困難のなかに生きてきたからだと思います。困難のさなかにあることが、人をして文学へと向かわせるのです。植民地時代、独立後、テロリスムの時代、アルジェリア人たちはいつも、途方もない苦難のなかを生きてきたのです。
□あなたは世界のフランス語表現文学（フランス文学）の一翼を担われているわけですが、アルジェリアのフランス語文学の重要性をどう考えますか？
■もちろんフランスのフランス文学の伝統はたいへんな蓄積を持っています。でも逆にいえば、フランスの文学はフランスのなかに閉じているように感じます。とりわけ出版や批評を含むフランス文学界はとても閉鎖的です。みずからの伝統にがんじがらめになっているように、私は強く感じています。多様性を受け入れない傾向があり、活力の低下が指摘できるのではないでしょうか。たとえば私の最新作についての記事は、いままでたった１つしかありません。故意に無視し排除しようとしているようにすら感じます。フランスの文学界は、とても狭い窮屈な排他的な世界です。そんなところには、あまり見込はありませんね。

フランス以外の場所の方がこれから期待できるのではないでしょうか。文学を書くのにお金はいりませんから、先進国でなくても問題ありませんからね。映画やテレビ番組を制作する財力がなくても、書物は、たったひとりで、紙と書く道具さえあれば、創り上げられるのですから。

本当に書くべきことを持っている人は、ひっそりとかもしれませんが世界のあちこちにいるはずです。これからますます出てくるでしょう。

【お気に入りのサン・テグジュペリの絵を前に】
砂漠を愛し、たびたび従軍し、『星の王子さま』ほか人間をみつめる作品を書き続けたサン・テグジュペリは、ヤスミナ・ハドラのもっとも敬愛する作家なのであろう。絵は、アルジェリアで軍務についている姿か。

□あなたは検閲を逃れるために偽名を使ってこられたわけですが、アルジェリアではいまでも検閲制度はあるのですか？
■検閲はなくなりました。しかしそれに代わるものとして、出版後の告発と、発売禁止という措置が存在します。問題は、これによって、むしろ、売名行為のために、わざわざ反社会的な内容の作品・著作を発表する、低劣な書き手たちが助長されていることです。そしてこの無益な制度はヨーロッパからもたらされたものです。

〈文学と社会、文学と心の自由〉

□どういうことでしょうか？
■たとえば私は昨年、欧州議会に喚問されました。私の唱える、文化間交流とは何なのか、議会で詰問を受けたのです。
□称賛のために呼ばれたのではないのですか？
■いいえ、非難・告発を受けるために呼ばれたのです。さきの詰問を受けて、私は逆に質問し返しました。あなたたちはいったい何を知っているのか、と。イスラム教について、イスラム社会の生活について、ヨーロッパの人は何も知らなすぎるのです。そしてそれゆえに、私の作品が不穏なものだと言って詰問し、告発します。そしてそのことがメディアで報じられます。すると書くべき内容を持たない人たちが、注目を集めたいがために、わざわざ「危険な」イスラム社会あるいはヨーロッパ人に敵対するアラブ人というイメージをふりまく著作をどんどん発表するわけです。そしてそうした実に多くの書き手たちのもくろみ通りこうした書物が注目され、アラブ＝イスラム社会に対するヨーロッパ人の反感を助長します。こうして悪循環がますますひどくなっているのです。たしかにアラブ＝イスラム世界のさまざまな国々がいろいろな問題を抱えています。しかしそうした問題を本当に考えたいのではなく、ヨーロッパ人たちの、あるいは自分の周囲の人たちの潜在ニーズに応えて一旗揚げるために、そうした問題を「売る」書き手たちがいるのです。彼らにとっては、社会矛盾もさまざまな事件もみな「売りネタ」というわけです。
□私はセンセーショナルにイスラム世界の事件を描く作品は好きになれません。またイスラム社会をあまりも表面的に描く作品が多く、残念に思っています。だからあなたの作品はとても貴重だと思うのです。社会の大きな動きとそのなかで生きる個々人の苦しみや不安が、どちらもみごとに描かれています。『テロル』はもちろん劇的な状況を描いた作品ですが、人生において個人が“すべてを失う”ということがどういうことなのか、主人公男性の内面を通じて描き出してくれました。
■そうですね、おそらくあなたは、イスラム社会を全面的に賛美するか、非難・告発一辺倒に走るか、どちらかの陣営に二分された書き手たちに辟易しているのでしょう？
□まさにそうです。私はテロや社会不安をわざわざ劇的に描くような作品はきらいです。むしろ、人々の日常生活を描いた作品が好きです。
■しかし、ほんとうに何も問題のない平穏な生活は、文学で書くに値しませんよ。人間は社会の矛盾のなかで、社会との葛藤のなかで生きているのです。巨大な、深刻な、社

会の問題と厳しく対面している人間を、文学は描くのです。書物というのは「市民」の価値を表現するものです。
□「市民」とは？
■「市民」をご存知ない？
□□英語で citizenschip ですね。
□まさにその「市民」citoyen、あるいは「市民性」citoyenneté、citizenschip という言葉あるいは概念が、いったい何なのか、それがわからなくて、私はずっと考えてきたのです。「市民」とはどういうことですか？
■そうですね…。では、お教えしましょう。「市民」ないし「市民性」とは、人間が社会のなかにある、ということを示す言葉です。社会の中に生きる人間、人間が社会の問題に立ち向かい社会への積極的なかかわり（アンガージュマン）によって生きているということ、それが「市民」という概念です。文学の書物はその「市民」を描くのです。
□ありがとうございます。まさにあなたの作品はそういう意味での「市民」、社会のなかの人間の姿を描くものですね。
■それに、市民と社会との関わりは、ほんとうのところは文学によってしか描けないのかもしれません。私はこの意味では、書物・文学は本来的な「自由」の場だと思っています。

実際私は 1997 年に発表した作品『狼たちが夢見るもの *À quoi rêvent les loups*』のなかで、俳優になるのを夢見ていた一人の平凡なアラブ青年が、社会の腐敗と不正のただなかで、いやおうなしに危険な活動家になっていく様を描きました。そんなことを描いた作家は、それまで一人もいなかったときにです。むしろその後、世界の方がまるで私の作品をまねるかのように、こうした問題が一般化してきたのです。そして 98 年の『主の羊たち *Les Agneaux du Seigneur*』では、教育を受けた、経済的にも恵まれているはずのイスラム世界の青年が、希望をもって生きることができずにテロ活動に身を投じてしまう姿や、次々に若者がテロに走るさまを描きました。私はしばしば、現代世界の予言者のように言われますが、そうではありません。書物、文学とは、まさにそういう場なのです。人間と社会との関係を深く見つめ、ありうることについて、つきつめて考えられる場であるのです。自分の頭なかで、自由に、思い切り、ね。だからこそ、私にはああした作品が書けたのでしょう。

とにかく書物というのは、ほかでは不可能なことができる素晴らしい場です。書く側にとっても、読む側にとっても、ですよ。
□あなたは小さいころから書物がお好きだったのですか？
■そうです。さきほど私は若い時に詩を書いていたといいましたが、私の家系は大詩人の家系なのです。先祖は 1492 年にベルベル遊牧民のある部族の長となった人です。私の苗字モウレッスフールは、その人の名を今に引き継いだものです。彼は部族長つまり為政者であり、そして大詩人として有名な人でした。爾後、代々私の家系は詩の才能で知られてきたのです。ですから自然に私は文学と書物に幼い頃から親しんできました。私は子供の頃からスガワラ・ミチザネが大好きでした。彼もまた為政者でかつ大詩人だっ

た、と言えますね？　だから私はとても親近感を覚えて、彼の詩を繰り返し読みました。そう、私は日本とはご縁があったのですね。そんなわけで私は日本にあこがれ、日本贔屓だったので、バカロレアに合格した時に日本を紹介する何巻本もの大著をプレゼントしてもらいました。それをまたむさぼるように読んで、ますます日本への思いを募らせてきたわけです。
□ぜひまた日本にいらしてくださいね。
■ええ、ぜひ。私はとても旅行好きなのです。
□アジアではどんな国をご存知ですか？
■日本は昨秋が初めてでしたが、インドネシア、タイ、ベトナム、北京、上海、その他、さまざまな国や都市をすでに訪れています。私の作品は世界 40 カ国以上に訳されているので、ひっきりなしに招待を受けるのです。
□40 カ国以上ですか！　すでに 36 の言語に訳されていると私はどこかで読みましたが、さらに増えているのですね。
■たとえば英語の場合、言語で数えれば一つになってしまいますが、国の数ではもっと増えるという面もあります。

〈おわりに〉

□長い会談になって申し訳ありません。最後に二つ、質問させてください。あなたにとって文学の意義、文学の使命とは何ですか？
■書物（文学）に、なんらかの限定された使命を与えてはいけません。さきほども言ったように、書物とは「自由」の世界なのですから。書物のなかにこそ自由があるのです。残念ながら、たとえば現在のフランス社会に「自由」があるとは言えません。「自由・平等・博愛」を謳う国なのに、そのうちのどれ一つも実現されていません。残念なことです。もちろん現実社会において、理想の実現が容易ではないことはわかっていますが。
□それでは最後の質問です。『昼が夜に負うもの』のジェルメーヌと、主人公の父親は、その後どうなったのでしょうか？
■（笑）それは私にもわかりません。私もいつも考えています。あの人たちはどうなったのだろうと。あるときはこうではないかと考え、またあるときには違うように想像して楽しんでいます。書物の魅力は書かれずに残されたところにあるのです。ですから好きなように考えてください。
□ありがとうございます。ジェルメーヌはフランスに帰ったのだろうか、独立時の混乱を生き延びたのだろうか、どんな体験をしたのか、父親はどこかで生きていたのか、母親はどうなったのか、などなど、私は夜中にいつまでも考えたりしています。気がかりで眠れなくなりますが、それはとても楽しい時間です。あなたの作品の続きは、私の心のなかにあるまま、というわけでよいのですね。
■そのとおり。私はしばしば『カブールの燕たち』や『テロル』の続編を書いてくれと頼まれるのですよ。でもそのつもりは全くありません。書物自身がもっている自由な余地を侵してはいけませんからね。

□今日は、こんなに長時間にわたって、ほんとうにありがとうございました。
■私こそ、楽しい時間をすごしました。また、お会いしましょう。

〔了〕

【一同で記念撮影】

後記

会談では、途中、「筑波大学北アフリカ研究センター（ARENA）」の組織と活動、ARENA の下部組織であるチュニスの「筑波大学北アフリカ・地中海連携センター（CAMMRE）」および、昨年筑波大学が採択された文科省のプロジェクト「グローバル 30」とそれを受けて、チュニスを本拠地に展開している留学交流促進のための「筑波大学海外大学共同利用事務所 BUTUJ」の活動などを説明した。ヤスミナ・ハドラ（いやこの場合は、むしろ、モウレッスール所長と呼ぶべきか）は、大変興味を示され、アルジェリア文化センター所長として今後の協力を惜しまないと約束してくれた。

文責：青柳悦子　写真提供：岩崎真紀